

追悼：教え子から見た坂本先生の研究と教育

大石衡聴・村岡諭・安永大地

坂本勉先生は、2014年7月23日、膵臓がんと御闘病の末、満60歳でお亡くなりになった。2013年4月に手術のために入院されるとの知らせを受け、大変驚いたが、その後、一旦は回復され、2014年の2月には皆で還暦のお祝いをしたばかりであった。教え子をはじめとし、先生の御薫陶を受けた者たちには未だ信じがたいことである。

先生は、日本の心理言語学研究のパイオニアとして、私たちに研究のおもしろさ、楽しさ、そして少しの辛さを教えてくださった。ここでは先生の御研究を振り返るとともに、私たちがどのように導いてくださったかを少しだけ紹介したいと思う。

先生がニューヨーク市立大学に留学され、大学院で研究なさった最大の関心事は、「空主語文の処理」である。「太郎が花子に東京に行くことを告白した。」では、「太郎が東京に行く」解釈が優勢である。その一方で、「太郎が花子に東京に行くことを命令した。」では、「花子が東京に行く」解釈が強くなる。それぞれの文で、誰が東京に行くかは明示されていない。この明示されていない主語のことを空主語と呼ぶ。そして、二つの文に共通する「太郎が花子に東京に行くことを」までを読んだ時点で、日本語話者は、どんな情報を参照して「東京に行く」人は誰かを解釈しているのかという問いに対して、認知心理学的な実験手法を用いた実証的な御研究を進められた。先生が取り組まれたのは、母語話者による文の理解であったが、先生の御研究は、学生により広い研究対象を考える機会をくださった。母語話者に限らず、幼児や外国語学習者を対象とした研究を行う学生が先生の後に続いた。言語の理解だけでなく、産出や獲得、学習、喪失、障害という様々な側面から考えるきっかけを与えてくださり、多くの学生が人間の言語使用の不思議に取りつかれた。

脳波を用いた言語理解研究を始められたのも坂本先生が先駆けである。「柔らかい色」のように、異なる感覚モダリティ（この例だと、触覚+視覚）に属する語を組み合わせた表現を共感覚表現と呼ぶ。しかし、感覚モダリティの組み合わせには制限がある。触覚と視覚の組み合わせを入れ替えて、「赤い手触り」

のように、視覚に関わる形容詞と触覚に関わる名詞を組み合わせると途端に容認できなくなってしまう。この感覚モダリティの非対称性を我々の脳がどのように扱っているのかについて、N400 という事象関連電位成分に基づいた考察を行われ、そのお仕事は *Brain and Language* に掲載されている。言語理解に限らず、脳波を用いた認知科学研究に広く興味を持っておられ、毎年 2 月に福岡で通称「脳波祭」という場を設けてくださっていた。先生を慕う研究者や学生が集まり、現在進行中の実験計画・途中経過などを持ち寄り、色々な悩みを共有し合う場であった。懇親会は「さかな祭」と呼ばれ、先生が玄界灘で釣ってきてくださった海の幸を堪能するのもこの研究会の醍醐味であった。

坂本先生の教育は、学生が自由に研究できる環境を作ってくくださっていたということに尽きる。学生の拙い考えを尊重してくださり、「やってみなはれ」という力強い後押しをしてくださった。「坂本組」と呼ばれる研究室では、大学院生、学部学生に多くの経験を積ませてくださった。学生がやりたい実験のためにさまざまな設備を整えてくださったし、多くの学会や研究会に連れて行ってくださり、国内外の研究者と議論する機会を与えてくださった。坂本組では、博士課程の学生が修士課程の学生の研究の相談に乗り、修士課程の学生が学部生の相談に乗るというスタイルが基本だった。学生同士で話し合った結果を先生のところに持って行き、さらに先生と一緒に考え方やアイデアを修正するという繰り返しだった。「指導教員のワシがわからん説明は他の人にわかってもらえるはずがない」と言われ続けたことは忘れられないし、今でも研究成果を公開するときには必ず意識することの一つである。

坂本先生との思い出を書きだそうとすると、ここには書ききれないほどになってしまう。先生が釣り上げられた新鮮なお魚をいただくことはもうできないし、言語に対する先生のお考えを伺うこともできない。大変寂しいことである。しかし、後進の我々の拙い考えはきっと先生に届くだろうと思う。残された我々は、先生がおひげをさすりながら、ニコニコと話を聞いてくださる姿を思い浮かべながら、一層の邁進をしていきたいと思う。

坂本先生、私たちにたくさんのことを教えてくださり、ありがとうございました。まだまだ安心できない教え子たちかもしれませんが、どうか安らかにやすみください。

(2016 年 2 月 記す)